

Title	渡辺京二著『日本コンミュン主義の系譜』
Sub Title	Kyoji Watanabe, "Intellectual origins of modern Japanese communes"
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1981
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.2 (1981. 2) ,p.131- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19810215-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

渡辺京一著

『日本コミュニケーション主義の系譜』

はじめに

同時代を生きる人間として、社会現象を歴史現象に読みかえるとき、それを果たそうとする人間のすべてが姿を現わさないわけはない。それはまさしく人間がその知識と経験のすべて、つまりトータルな人間を全投入して、現象の意味を歴史に問い直し投げかえす営為だからである。知識人とは、とりわけ△明日の創造▽にはりきりなばかりの視線凝視を要求する△時代▽を生きねばならぬ場合には、まがいがいなく自己にも同定しなければならぬ歴史の意味連関を同時代にぎりぎりまで問い詰めることに一所懸命な人間をいう。

この極限的な知的営為の担い手に社会学者がいる。そして現在、日本は世界共時的に人間の生活空間を保持しうるか否かの時点に立っている。そこでの知識人と社会学者とは、一枚のコインの表裏関係なのか、それとも全一的な統一体なのか。

私はここで知識人論をやるのではない。だが、社会科学を、何やらこの緊張関係として認識しないかのような無色無味無臭の客観性に立ちつくす傾向が、私たちの住む世界に定礎してしまつた憾を私がつめていることは確かである。それはおそらく「歴史に依存することによつて、歴史の犠牲になる」(P・ゲイ)ことを意識しない人間の情況ではないか。

われわれは疲れたのだろうか。そうだとすれば、われわれは何に疲れたのだろうか。それはおそらく△情勢▽に疲れたとしかいいようがあるまい。その場合、「日本浪漫派が嫌悪した情勢論とか時務論はむろん社会という抽象的な空間にかかわる言葉」であり、「この個体からいえば不可視であるはずの抽象的空間の動向について云々し、そこから個体である自分ないし他者についての当為をひき出し、てくるような情勢論」(一九七ページ)に疲れたと確認してもよい。

だが、「社会という客体的であると同時にフィクショナルであるような空間を、自分が日々具体的に経験している疑いようなない生活空間にたぐりよせようとするときに成り立つのが情況という概念であつて、すなわちそれは社会というフィクションでもなく生活という具体でもないようなひとつの思想的な空間を指示するというほか」(一九八ページ)のないところまでゆきついた上での悪戦苦闘の果てのそれは疲れたつたのか。そして、「そのような思想的空間は、それまで可視的と意識されていた生活空間が実は不可視的なものに見えてくるような逆転を契機として成立するもののように」だと指摘されれば、私が今おぼえている手足の指先から体内のすべてが

ほとぼしり流れていつてしまふような脱力感、私の怠惰と無能力によるものだとしかいつてはならないのだろう。

しかし、著者が自分の「情況論への嫌悪」を語り明したところで、「何らかの集団の共同性が存在しうるとすればそれは沈黙においてではないか」という偏執的な思いこみに、私は共感するまでに疲れこんでいて、「いわゆる運動論的な議論によつて深化するよるな共同性なるものが私にはまつたく信じられない」(二〇二ページ)点に同調するほど、山賊、夜盗、風の人的結合にへたりこんでいることを私は知らねばならない。

独りで立つていようとして立てなくなりそうな予感におびえるものと、〃独り立つ〃ことを同時代の中で想いもよらないひととが、いつしよにしていることそのことが怪しいことなのだ。それすらも情況なのだから、「社会という抽象空間と具体的な個の所有する実存空間とを貫通的にとらえたい」欲求を遮断できるはずもなく、その欲求を激しい身悶えを媒介として「情況」として成立させる疲れと、透過不能な霧のような形でのみ存在する、情況空間をなお擬視しようとするこの疲れとがなおさらに重合しないではすまぬ。

だからといつて、「いつたん思想的言辞を吐いた以上、自然過程をふんでただのおとなとして老いるというまつとうな途は、永遠に閉ざされた」(二六八ページ)と「あとがき」に書いた著者に、私も左袒しなければならぬ。それはみずから知識人として同一化しなければならなかつたことへの、ぎりぎりの覚悟でなければならぬからである。

※

学術書や学術論文なるものから知的、けわしき、がなくなつてきたのは、いつたところからなのだろう。私がいつとはなしにそういつたものにかき立てられた記憶を失つたのはいつごろだつたのだろう。ウェーバー、マルクス、マンハイム、あるいはA・シュツツやP・バーガー、丸山真男、安藤英治、藤田省三、吉本隆明、そして最近では石牟礼道子や土本典昭にうつつを抜かすことがあつても、今時の政治学には「政治は上部構造」としか思わせぬもののが揺曳している。

それはおそらく、「はじめに」で力んで「疲れ」を告白してしまつたにしろ、〈現実〉を現象からきりとる私の認識の貧困によるのだらうし、その貧困をすら問題にしえぬ私の希薄な意識にもよつていふのだろう。私がすぐれた評論を読まねばならないのは、この痛苦にも似た認識と意識の鮮烈さによつて、私の「貧困と希薄」を少しでも解除したいからにはかならない。そしてそこに本書がある。

※

※

著者は日本を見る。いや日本だけを見ようとする、といつた方が良いかもしれぬ。だが、日本に埋没する気配を著者はまつたくもたない。皇国少年であり、姦跡で青年になつた身が「日本の知的後進性」をしみ入るように感得しなかつたはずもなければ、左翼の線列に参加することでの挫折を何度も味得しないわけもない。むしろ、

そうしたところから著者は突きぬける意思を次のように論理として立てる。

日本的知という井戸がだめなのは、それが井戸であるから、つまり西歐的知とはともすれば遮断されがちであるからだろうか。そうではあるまい。……

問題は井戸の中にあつて井戸を越える方法をもつことである。いいかえれば、井戸を深いほうにたどつて世界の水面に通底する回路を設定することである。……規準をすべて井戸の外に求めねばならぬ意識こそ井戸の本質を表わしているのだ……

日本的知の後進性はむしろ、アジア的ディスポティズムによつてその根本を規定されている。広く世界に窓を開いているつもり、近代の先端を走つていけるつもり、の学芸界が、近年ますます批評の相互排除の方向、派閥的な相互係身の方向へ進んでいるのは、むしろそのアジアの後進性の表現にほかならない。彼らはアジアの後進性から逃れようとして、いつそう深くそれにはまりこむのである。私はそういう方法はとらない。かつての私の無知が、すべてを疑えという徹底的批判の方法を欠いていたところに胎まれたのだとするならば、……私は逆に、アジアの共同性という井戸の底へ向うことによつて世界的思想と通底するという、私たちに固有な思想の独立独行の途を選ばねばならぬのだ。(二五六—七ページ)

日本の底を掘り抜いて世界に通底する思想的営為、これは特殊から普遍へと突き抜けることに成功するべく努力した、われわれの数少ない創造的先人たちの途であつた。だがその場合でも、井戸からはいあがり脱出する意向こそが多かつたし、あるいは自然科学の普遍性に瞞着されて、特殊日本に落ちこんで自覚しないたぐいが多か

つた。しかし、突き抜いて、世界に通底するには掘り抜くことしかない。この掘り抜きは孤絶の作業である。その作業の一端こそが第一部「日本コミュニオン主義の系譜」におさめられた八篇の論文なのである。

※ ※ ※

日本を掘り抜いて世界に通底するのを著者の方法論の一方とするならば、他方は日本をつくつている基層民を掘り抜くことにある。その場合、つねにわれわれにかぶさつてくるのは天皇制国家の問題である。これを貫通しなければ、基層民にはゆき当らない。「戦後天皇制は可能か」がこのことばを語っている。

著者の天皇国家論は天皇制国家も徹底的に人為的国民国家形成とする点で、私を満足させる。それは北一輝が『国体論及び純正社会主義』で見抜いた、「近代日本国家の天皇は、それまで存在していた中世的天皇（さらにさかのほれば古代的天皇）」とは、少なくとも論理的には何の関係もない『国家』の被造物」（一七九ページ）とする主張である。言いかえれば、「天皇をそのようなものとして国民の意識に定位するための条件は、歴史的にきわめて限定されていたとみるべきである。それは明治から昭和にいたる日本の戦前社会においてのみ成り立ちうる、特殊な条件であつた。つまり天皇を国民の潜在意識のなかに深く根をもつような存在と思ひこませるような作業は、わずか八十年間の日本戦前社会においてのみかろうじて可能な作業だつた」（一八〇ページ）のである。

だいたい明治維新は、帝國主義時代にあつて、「西欧列強の武装包囲に対抗しうる富国強兵の國家を創設せねばならぬ」という動機を根底とした明治指導者たちが、「封建領土の家臣としての三百年に近い記憶に縛られており、高貴でより正統な君主を探し出さずには、それまで臣属してきた君侯の支配を廃絶することは不可能」(一八三ページ)な事態をふまえて考察されねばならない。

さらに明治指導者たちは、資本制にもとづく國民國家＝軍事的強國の等式を見抜いていた。ここには天皇による資本制國家などはありえない。「明治國家はどうあつても……彼らがすみずみまで指導しつくし支配しつくす國家」でなければならなかつた。

封建的家臣としての彼らには、この天皇は手段にちがひなかつたからこそ、國政指導上無力でなければならぬ一方で、國民は臣属する対象をもつべし、という意味で神聖君主の相貌をもたせる必要があつた。さらに天皇制イデオロギーが創出されていつた。つまり、「天皇は親であり國民は子であるという家族國家原理と、天皇は思想・學問・信仰などのあらゆる價值的レヴェルで個人の内面を規定しようという教育勸語原理とを二大支柱とする」それである。かくて、「天皇は、一面ではきわめて西欧的な立憲君主であり、一面ではきわめて東洋的な家父長であるという、ヤヌスの存在であらねばならなかつた。」(一八六ページ)

この天皇制イデオロギーは、明治指導者の民衆支配の統治の秘薬であつたはずである。しかし、資本主義が富国強兵と共に発達することは、市民社会的現実の伸展でもあつた。つまり「安全弁の回路」

としての天皇制イデオロギーは、右翼ラディカリズムの形態をとつた大正中期の逆流と衝突しなければならなかつた。しかし、その実体は、△共同性への飢渴√にほかならない、と著者はいう。「この共同性への飢えは直接わが國の共同体民の伝統的心性から発するといふより、市民社会的現実の進展のただなかに、共同体から馳り立てられ漂流する個の、特殊に昂進した欲求とみるほうが正確である。……このような病的に近い飢渴感は、かつてこの國の伝統にはなかつたものとさえいふことができる。この飢渴は天皇性共同体神話とのあいだに、おそるべき共鳴をひき起した。昂進は相互的であつた。その共鳴から相互昂進にいたる過程の結果について多くをいふ必要はない。それは周知の昭和前期の騒亂へ行き着いたのである。」(一八七ページ)

ここでどうしても、著者の次の指摘だけは引いておかねばならない。「昭和期のいわゆる天皇制ファシズムは、けつして明治期の天皇制専制支配の昂進した姿なのではない。……兩者のあいだに一貫している過程はただ、資本制市民社会が基層民を把握する広さと強度が増大する過程である。天皇制神話が國民統合の手段として順調に機能しえた後者の段階は、資本制市民社会の原理が基層民を把握する一定の弱さにあい応じており、前者の段階において天皇制支配をおびやかす逆流の流源となつたことは、それが基層民を一定の強度で把握しうることの指標である。そして戦後社会において、天皇制神話が正逆いずれの方向にも機能しえなくなつたということとは、まさに市民社会的原理が全基層民を完全に把握しつ

くしたことの指標なのである。」(一八八ページ)

※ ※ ※

基層民が市民社会化の論理と現実の中で個化され、したがって人間としての共同性に飢えたとき、天皇制神話は支配エリートの市民社会移行への意思の安全弁ではなくなり、支配エリートの存立を脅かすにいたる倒立の思考過程、それを著者は思想的史的営為として確認しているのである。したがって、西郷にしても岡倉天心にしても、あるいは石光真清や権藤成卿におけるそれぞれの位相が、この論脈の中に位置づけられ、それぞれが抱懐していたはずのナショナリズムが、どこかで砕け散つていなければならぬ精神の地点をさぐり当てるのである。たとえば、「彼は、国家とか国際政治とか政治的イデオロギーとかいうものは、歴史の谷間にある生活大衆を危難から救済するものではなく、かえって彼らを谷間に蹴落すものではないのか、という認識に達したわけであつて、われわれはここに石光真清における「ナシヨナリズム」がその核心において解体されたことを確認できるのである」(七六―七七ページ)の指摘を例示しておこう。

しかし、こうした安全弁を突破する逆流のもつとも顯示的な例は、やはり北一輝であり、二・二六における叛乱将校であろう。著者が、「北は、西欧型市民社会は人間の棲む社会ではないという日本基層民の感性を土台に、自己の共同社会主義を樹立しようとした。つまりアジア的共同性の思想を、△近代√という批判的るつぽ

をぐぐらせることによつて現代に甦えらせようとした。しかし彼の思惟の骨格をかたちづくつた東洋的觀念弁証法のために、共同社会イクオール民族共同体という呪縛の圏外からついに脱出することができなかった」(一一五―一六ページ)と見透し、「北が倒れたところは、われわれが歩み出す地点である。アジアの共同体にかくれている△個√の根つこを掘りあげることができないものか。そしてそれを西欧的個と等距離に置いて、そのうえに世界的な共同社会の展望をひとつの思想性として確立できるものか」(一一六―一七ページ)と提起するのは、まさしく見るべきものを見たからにちがいない。

二・二六については、著者の行論はここでは省略する。だが「復古的天皇の神聖支配下にある臣民国家などという、かわい気のある夢想などではなく、まさに機関説的状况(すなわち市民社会への過渡段階)の『一段高き進化』へ向けての変革」(二四〇―四一ページ)を叛乱将校が意図したからこそ、支配者たちは彼らを抹殺しなければならなかつたのだ、とする分析的発見は、私には、著者の方法論に定礎されている最重大なところだけに、考えこまざるをえない。これは間違いなく、H・U・ヴェーラーなどのテーゼと共に、われわれが共闘すべき△ファシズムと近代化√の問題であるにちがいない。

おわり

私が日本のネーションとナシヨナリズムに決定的な公政治的現実△を見たのは、石光真清の四冊の手記に、藤田省三さんと二〇年後の邂逅によつてぶつかつた、そのときであつた。「く」の運命

とひとの行末とがこまやかに結ばれていた時代であつた」という一文にであつたときの息づまるような衝迫を私は忘れかねている。

そこから私は、できるだけこのひととくに、むすびのところを見たいと思つてきた、それは書くことも書けることも願わない、私の日本人の道であつた。そして、あちらこちらと気のおもむくままの私の遍歴のなかで、実は渡辺京二氏にはなんどもぶつかつてきた。だが、私にはどうも分らないところがあつた。『小さきものの死』と『神風連とその時代』そして『評伝宮崎滔天』がうまく結びついてくれないのであつた。

本書の二度目を読みおえたとき、私にはようやく分かるものがあつた。石牟礼道子氏のものを読んでいたときにゆき当つた、地の底を流れ、世界の地に通底する暗河(くら・こう)の思想に立つことの意味がある。

日本人の思想をとりあげるとは、自分自身の腑分けをすること以外の何物でもなく、したがつて、限らないとおしみと限らない冷徹さが要求される。そしてさらに、それを現実化する明晰さが必須である。私には、著者の営為が、学問以前と以後を見事に兼撰したものに見える。そして学問の現在を、このようなものとしてあるはずなのである。

(四六版、二六八ページ、葦書房、一八〇〇円)

内山 秀夫